

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 1 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520176

研究課題名（和文） 勅撰和歌集と古代礼楽思想の和漢比較研究

研究課題名（英文） A Wakan Comparative Study of Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music and an anthology of Waka (Japanese poems) selected and edited by the Japanese Emperors

研究代表者

渡邊 秀夫 (WATANABE HIDEO)

信州大学・人文学部・教授

研究者番号：90123083

研究成果の概要（和文）：平安から室町時代にかけて編まれた 21 代にわたる勅撰和歌集編纂を支える思想基盤には、中国を中心とする東アジア儒教文化圏に共通する古代儒教による「礼楽」思想が一貫して存在し、この礼楽思想の日本的展開、我が国固有の変容の成果として勅撰和歌集が編纂され続けたこと、さらに、この「礼楽」の思想的基盤(特に、中国古代音楽論)への認識を深めることが、勅撰和歌集研究に不可欠の要件であること等の諸点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study has revealed the following three-fold argument:

(1) The Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music, which is widespread in East Asian Confucianism Culture with China being the center, has been one of the backbone ideologies for the compilation of the 21 volumes of The Anthology of Waka selected and edited by the Japanese Emperors during the Heian and Muromachi era;

(2) This Ancient Chinese Thoughts on Manners and Music has evolved in Japan in its own way, and The Anthology had been continually compiled as the showcase of this Japanese-style development of the thoughts;

(3) and hence, a deep understanding of the foundations of this Ancient Thoughts on Manners and Music, especially understanding the Ancient Chinese Music, is indispensable to the studies on The Anthology of Waka

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：平安朝文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：勅撰和歌集 礼楽思想 和漢比較文学

1. 研究開始当初の背景

著名な作品に関しては、従来から少なからぬ個別的研究があるが、①「勅撰和歌集」を一連の国家的文化事業として、総体的・通時的にアプローチするものは極めて少なく(後藤

重郎「勅撰和歌集序に関する一考察」、深津陸夫『中世勅撰和歌集史の研究』は、和歌文学プロパーによる希少な成果の一例)、かつ②和漢比較(日中韓比較)文学的な観点から研究したものは、その考察の重要性・必要性にも

拘らず皆無に近い。また③現行の研究姿勢は、明治・近代以来、偏狭なナショナリズムや、旧弊な思想の産物としての誤解・曲解のうゑに蔑ろにされ、前近代の儒教的思想基盤を前提とした歴史・文化的な正当なアプローチがなされず、日本古代文学史研究上の大きな欠落となっている。結果として、④近代以来の和歌研究は、前近代の東アジア地域に共通する思想的な枠組み(古代儒教、取り分けて礼楽思想)に対する理解に乏しく、古典テキストの解釈がその根拠を曖昧にし、歴史を逸脱した恣意に流れやすいといった、根本的な欠陥があり、これを正すには、古典古代における古代儒教(礼楽思想)受容に関する復元的検証が不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、文学のみならず、歴史・思想・絵画・工芸・服飾などを含め、自然風物の表現、季節観や抒情の構造を始めとして、あらゆる美観や物の把握態度、行動様式に至るまで、広く日本文化の基層的な規範となって来た「勅撰和歌集」総体に関する和漢比較研究である。『古今和歌集』以来『新続古今和歌集』に至るまで21代にわたって勅撰和歌集が編まれ続けたことは、内外の文学史上稀有の、極めて注目すべき事象である。武家による鎌倉・室町政権下にあってもなお、それは、天皇権威のもとに政治的権力を保持するために不可欠であったし、広く文化総体のあり方を深く規定するものでもあった。この、天皇(院)の名の下に企画・遂行される国家的な事業である勅撰和歌集の編纂は、なにゆえに、またいかなる思想のもとに我が国固有の事象として成立し長きにわたって継続されえたのか、これらの諸点を明らかにすることを最終的な目的とする。具体的には、

①勅撰和歌集の編纂は、儒教文化の日本の変容の一つであって、しかもそれが我国特有の事象として生成されたこと、及び、②和歌文学のもつ力の根源的な深さを知らしめるとともに、古代日本の詩歌をめぐる文化の構造が明確化される。③さらに、これまで手薄であった総体としての「勅撰和歌集」の本質が明らかにされ、古代和歌文学史の根幹を成す事象への新たな知見が得られること。また、④権力を支える「権威」の問題を通じて歴史学や思想史にも大きなインパクトを与えるとともに、広く儒教文化圏における比較文化論的視野を大きく開くことになる等、以上の諸点を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、近来明確化されてきた和漢比較の視野——和文世界をその支盤となる漢文世界との動的・構造的な相互関係の中で共時的・通時的に分析評価する手法——の下、

東アジア儒教文化圏の歴史的動向をふまえ、わが国固有の文学・文化現象である勅撰和歌集の継続的編纂の意義を問うことを通じ、日本的なるものの固有性を広く普遍的な事象のなかに位置づけ、旧来の古典(和歌)文学研究に、学際的・総合的・比較論的な視界を拓こうとするものである。

(1)本研究を遂行するためには、古代社会を支える儒教的な思想・観念——特に、「礼(礼儀)」「楽(音楽)」思想の観点——を前提とするアプローチが必須要件となる。「礼楽」の思想そのものは、中国のものでありながら、しかも、中国本土にはこのような詩歌の勅撰は存在せず、より儒教的な考えが純粋培養された韓国にあっても、遂に継続的な勅撰和歌集の編纂は生まれなかった。この最も日本的(国粹的)とみなされて来た文学事象を解明するために、視野を広く東アジアの儒教文化圏のなかに開き、和漢比較文学的な手法のもとに再検証しようとするところに、本研究の大きな特色がある。

(2)本研究はまた、日本的なるものをより大きな視野から捉え直し、根源的に再検証する試みでもある。古代日本の歴代の勅撰和歌集編纂の事象を、東アジアの儒教文化圏における政治と詩歌の関わりを明らかにしながら、その日本的展開・変容という観点から、日本古代の基盤的思想であった「礼楽」(儒教の統治概念)をベースに考察し、この「日本的なるもの」の固有性と普遍性を比較分析する点に創意がある。

このような観点を前提として、平安前期から室町期に至るまで、勅撰という形での和歌集の編纂が、何故かくも不断に継続されたのか、その理由を検証・解明するために、以下のような具体的な手法を採る。

①中国・韓国等の儒教文化圏における詩歌と「礼楽思想」をめぐる類似例の調査とその分析結果の比較対照を試み、日本古代に特異な本事象の思想的背景を明らかにする。また、これと並行して、②日本古代(平安～室町期)における礼楽思想の受容の様態を、和歌文学ジャンル以外の分野にも広げて調査分析するとともに、③十分な解説が為されていない各勅撰集に附属された一連の「序文」群——とりわけ、漢文体で書かれた「真名序」本文の調査・校訂及び正確な解説を徹底し、これを一貫する強固な思想の成果として、勅撰集としての編集意図を明確化する。

4. 研究成果

(22年度)

古典研究にあつて、ブッキッシュな出典論・材原論では届かない手法的限界に、どのように向き合うのか。勅撰和歌集の序文の解説に際し、古代礼楽思想——先秦から宋学を経て知の基盤を成す儒教的人間観(性情論・世界

観)の体系的な理解——が、研究上いかに必要不可欠な前提であるか、についての考察を進め、「詩歌の発生論と〈型〉—「古今集序」の理解をめぐる—」(古代文学会 連続シンポジウム〈型〉のダイナミズム—古代文学の普遍と固有—)、「古典解釈における『近代』と『前近代』」(西田幾多郎生誕140周年記念国際シンポジウム 日本文化—その価値観の多様性—)等の国内外の招待シンポジウムでの発表・討論及びこれに付随する文献調査・資料収集を行った。これらを通じ、①現在大きな疑念も抱かれず一般化された近代以降の通説の一例を批判的にとりあげ、中・近世の古注釈類の解釈例をも参照しながら、前近代の“儒教的な思想的枠組み”を復元的に共有することによって、それらをベースとして成り立つ古代の言説の同時代的な(“本来の”“あるべき”)解釈を呈示し、一定の成果を収めるとともに、②従来の和漢比較研究における出典・材原論の限界性(なぜ、その時期にそのようなものをこのように意味づけ体系化したかという本質的な解答に迫り得ない)を打破するためには、当代文化の考え方の枠組み——礼楽を基本とする儒学的世界観の通時、共時的な思考体系(個々の材料を統括し意味づける大きなロゴス)を理解することが、古典注釈に不可欠であること等、次年度以降に向けた各勅撰和歌集序の注釈的研究手法上の有益な指針を得ることができた。

(23年度)

前年度に引き続き、古典研究にあつて、ブックシユな出典論・材原論では届かない手法的限界に、どのように向き合うのか。勅撰和歌集の序文の解説に際し、①古代礼楽思想——先秦時代から宋学を経て知の基盤を成す儒教的人間観(性情論・世界観)の体系的な理解——が、研究上いかに必要不可欠な前提であるかについての考察をさらに進めるとともに、②「仮名散文の創出—古今集序をめぐる—」(国文学解釈と鑑賞76-8)、や同済大学(上海)・北京日本学研究中心等での招待講演や研究者交流及びこれに付随する文献調査・資料収集を行った。これらを通じ、③中近世の注釈態度の根底に流れる儒教的思考体系に通底する古代の世界観を復元的に共有することが序文解説の前提であることが一層明確化され、最終年度に向けた成果公刊のための著書原稿『和歌の詩学』(仮題)の作成を進め、おおよその目途をつけた。

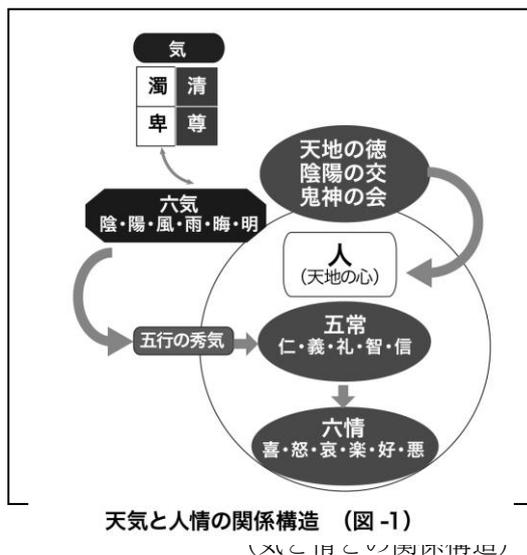
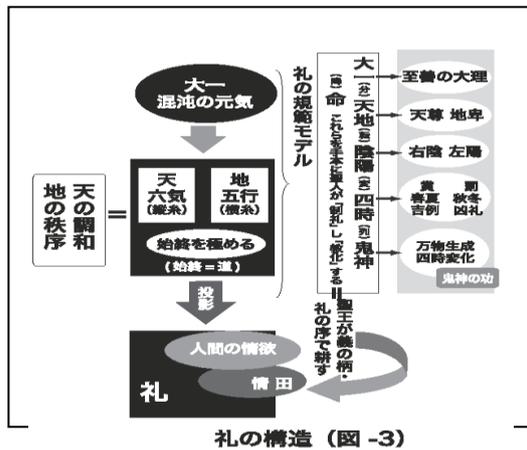
(24年度)

前年度に引き続き、勅撰和歌集の理解にあつては、古代礼楽思想——先秦時代から宋学を経て知の基盤を成す儒教的人間観(性情論・世界観)の体系的な理解——が、研究上いかに必要不可欠な前提であるかについての考察をさらに進めるとともに、①「日本古

典文学における和漢比較研究」(北京日本学研究中心・11月1日、14時~16時)等での招待講演や研究発表会「日中比較文学(古典)研究発表討論会」(台湾輔仁大頼教授、北京大丁副教授、北京交通大楊教授、対外経済貿易大馬教授、法政大小秋元教授ほか)及び研究者交流及びこれに付随する文献調査・資料収集を行い、これまでの和漢比較研究の手法的反省のうえに立ち、今日的観点からの方法的指針を再検証した。なお、本出張は、当初「日中国交正常化40周年事業」参加として計画されたものだが、中国教育部の指導により開催が延期されたため、当初の規模を見直して行われたものである。また、②12月4日、ワルシャワ大学東洋学部長を表敬訪問するとともに、これより先、3日午後、日本学科修士・博士課程院生約20名を対象とし、「日本文化と自然・四季」と題する記念講演を行い、さらに、同学科イヴォナ・コルディンスカ教授、園山千里ヤギェウオ大学准教授と研究交流を行い教育研究上の有益な知見を得た。これらを通じ、③真名序・仮名序の文体的特性の位相差から、仮名序の後進性(完成奏上時には附属されていなかったこと)が確認され、平安中期以降の受容史のなかで通説化した定見を覆しうる観点を提示した。④従来の和漢比較研究における出典・材原論の限界性を打破するためには、当代文化の考え方の枠組み——礼楽を基本とする儒学的世界観の通時、共時的な思考体系(個々の材料を統括し意味づける大きなロゴス)を理解することが、古典注釈に不可欠なことがより一層明確化されたが、この観点は、⑤従来の古典研究、例えば、勅撰和歌集に伍して同様にカノン(聖典)化を加速させる『源氏物語』の注釈行為(本文解釈にあつて時代准拠・中国古典の引用・同一化等を重視する)の歴史性を浮かびあがらせることとなる。すなわち、「仮名序」が国風化の進展に伴って仮名ぶみとしての自立的な読みを累積してゆくにつれて、仮名序古注に発する仮名序の権威化・カノン化が促進されることのアナロジーな関係は見過ごせない。折角、漢文世界を離れて自立的な読みを確保しながらも、却って、その注(解釈規範)に『毛詩正義』を典拠ふう引証することによって、漢文世界に寄り添い古典化する姿勢があることである。これは古典化されゆく仮名序(や源氏物語)の注釈の権威化の問題とあいまって、あらためて検証すべきもののように考えられる。本来通俗的な「ものがたり」であった『源氏物語』(の語りや享受)は、はたして中世源氏学が指摘するような漢籍類を「典拠」として引用するような位相になる表現行為であったかどうか、漢詩漢文制作における典拠(出典)とは一線を画した、仮名ぶみ・やまとうた、物語類における「典拠・

源泉論』の再点検が必要となる、など、これらの検証にはなお向き合うべき多くの課題があり、平成25年度～27年度の科研採択課題に接続させ、より深化させ大成させることとした。

また、中国人研究者の青島大学准教授・尤海燕氏との研究交流を促進し、「東アジア礼楽シンポジウム」(国際基督教大学)参加等を通じ、問題の所在を確認・共有しえた。本研究課題に示された私の研究目的と方法に共鳴する同氏を支援・誘引した成果として『古今和歌集と礼楽思想の研究—勅撰和歌集の編纂原理』(勉誠出版・2013.6)を公刊しえたことも、関連する実績のひとつといえる。勅撰和歌集の継続的編纂という文化事象を、中国古代の儒教的な礼楽思想の日本の変容という観点から検証しようとする問題の関心を共有する同学として、この分野における、いささか沈滞気味の研究動向に多彩な議論を誘発し、清新な視界の切り拓かれることが期待される。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計2件)

1. 渡邊秀夫 「仮名散文の創出—古今集仮名序をめぐって」(『国文学 解釈と鑑賞』第76巻8号, pp29-37, 2011.8, 査読無)
2. 渡邊秀夫 「詩歌の発生論と〈型〉—『古今集序』の理解をめぐって—」(『古代文学』50号, pp45-62, 古代文学会, 2011.3, 査読有)

[学会発表] (計4件)

1. 渡邊秀夫 「日本文学と自然・四季—古典和歌の『ころ』と『自然』 学術交流協定締結記念講演 2012.12.4, ポーランド共和国ワルシャワ大学日本学科・ワルシャワ
2. 渡邊秀夫 「日本古典文学における和漢比較研究」 日中比較文学研究会・公開講演 (日中国交正常化40周年国際学術研究会の代替), 2012.11.2, 中華人民共和国・北京日本学研究中心・北京
3. 渡邊秀夫 「古典解釈における『近代』と『前近代』」 西田幾多郎生誕140周年記念国際シンポジウム 日本文化—その価値観の多様性, ポーランド共和国・ワルシャワ大学中央図書館, 2010.11.8・ワルシャワ
4. 渡邊秀夫 「詩歌の発生論と〈型〉—『古今集序』の理解をめぐって—」 古代文学会・連続シンポジウム 〈型〉のダイナミズム—古代文学の普遍と固有—, 2010.7.3, 共立女子大学・東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊 秀夫 (WATANABE HIDEO)

信州大学・人文学部・教授

研究者番号: 90123083